

平成三十年十二月十日発行
皇學館論叢第五十一卷第六号
抜刷

冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・真継康総の尾張旅行

——熱田社参詣と松平忠吉訪問をめぐって——

伊藤信吉

皇學館論叢 第五十一卷第六号
平成三十年十二月十日

冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・真継康総の尾張旅行

——熱田社参詣と松平忠吉訪問をめぐつて——

伊 藤 信 吉

□ 要 旨

慶長九年（一六〇四）三月、冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・源康総達は尾張国に旅し、三月七日に熱田社を参拝、三月十五日に熱田社杜家や熱田の僧衆達と共に和歌会を催した。以前拙稿において、その折の詠歌を記した源康総和歌懷紙について源康総を地下官人真継康総に比定したが、公家達の旅の目的や旅程全体の正確な把握については課題を残した。

そこで関係する公家の日記を読みなおすと、為満・言緒達公家衆は、熱田社参後に尾張の大名松平忠吉を訪問していたことが推定される。先行研究では公家衆の熱田社参詣と和歌会のみが着目され、松平忠吉訪問については殆ど指摘がない。しかし公家衆にとって徳川一門の大名松平忠吉を訪問することは、熱田社参詣と並び旅の目的の一つであったと思料される。旅程についても、公家衆が三月七日に熱田社を参拝し十五日に熱田で和歌会に参加したことは知られていたが、この間数日間の行動は不明であった。しかしこの数日の間にこそ一行が松平忠吉を訪問したと考えられるのである。すると熱田社参詣から忠吉の居所（尾張国清須と思われる）を経て熱田へ戻り、熱田から伊勢へ渡海し、康総は帰京、言緒・秀賢は伊勢参詣に向かったと考えると、東海道を主とした往復路の行程としては合理的であると指摘できる。

また伊勢国桑名より道案内を行い宿所の便宜も担った熱田亀井道場時宗僧の宣阿は、公家衆の尾張旅行以前に冷泉邸月次和歌会に参加している。為満の都と地方をつなぐ歌人人脈がこの旅を支えていたと理解できよう。

□ キーワード

熱田神宮 奉納和歌 地震と信仰 冷泉為満 山科言緒 舟橋秀賢 真継康総 松平忠吉 宣阿

一、はじめに

慶長九（一六〇四）年三月、公家の冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・真継（源）^① 康総達は尾張国に旅し、三月七日に熱田社を参拝し、十五日には熱田社社家衆や熱田の僧達と共に和歌会を催した。参会者が熱田社の神職や熱田の僧衆を主としたこと、冷泉・舟橋・真継（源）の和歌懐紙が、熱田社に奉納されていたこと等から、公家衆と熱田社参詣・熱田での和歌会に関する先行研究がある。熱田社参詣・和歌会及び和歌懐紙に関しては山田蓉氏の先駆的研究があり、その後の『新修名古屋市史』^②も大凡同様の内容を記している。和歌文学の研究については、井上宗雄氏や神作研一氏^③が僅かに触れるばかりである。『慶長日件録』の記主舟橋秀賢についての解説にも、秀賢の熱田社参詣の事実を指摘するのみである。

為満一行の熱田社参は三月七日、和歌会は三月十五日で、一行のこの間数日間の行動は不明で、これを読み解くことが、旅の目的と旅程を正確に把握する鍵となる。詳細は後述するが、公家一行は熱田社参の後に尾張国清須の大名松平忠吉を訪問していたと推定される。また三月十五日の和歌会の後に一行が伊勢参宮を行ったとされるが、それも

含め断片的に残された日記史料を再度整理して、熱田社参や和歌会だけでなく、視野を広げて旅程全体を捉え直す必要がある。また従来等閑視されてきた、公家衆と松平忠吉や熱田の時宗僧宣阿との関わりも論じたい。

二、旅程と旅の目的

冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・真継康総一行の尾張旅行に関する同時代史料は、舟橋秀賢の日記『慶長日件録』、言緒の父言経の日記『言経卿記』が挙げられる。熱田での詠歌を記した冷泉・舟橋・真継の和歌懷紙は江戸時代後期に熱田社に奉納され、公家衆と熱田社家衆・熱田の僧衆達との和歌会については、後世の史料となる「張州雜志」から概要を知ることができる。^⑧

先行研究において山田蓉氏は『慶長日件録』を『言経卿記』で補い、為満・秀賢・言緒（康総については人物未詳）が三月七日に熱田社を参拝、十六日に伊勢参宮、二十一日に帰洛、という旅程を推定するが、三月七日から十六日の伊勢参宮までの一行の行動は不詳で、山田氏も「熱田社参後伊勢参宮まで詳細は不明であるが、その間尾張に滞在していたと考える事も可能であろう」と推測するに止まる。よってこれを正確に把握して一行の旅程と旅の目的を明らかにしたい。次に『慶長日件録』（史料①～⑩）、『言経卿記』（史料⑪～⑰）の記録を掲げる。

『慶長日件録』慶長九年（一六〇四）三月

- ① 一日、（略）冷泉亭へ行、来四日尾州へ可レ令_二下向_一為_二門出之_一也、双瓶重箱携也、夜半及帰宅
- ② 二日、晴、新衛門氷室へ遣、母堂御住山之間、予尾州へ下向頃申進畢
- ③ 三日、（略）次長橋局へ参、尾州へ罷下之間御所之事申入処、御心得之由被_二仰下_一、令_二満足_一者也、次家君へ参、

冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・真継康総の尾張旅行（伊藤）

次大聖寺殿・女御殿・近衛殿等今日御札ニ參、次冷泉・山科亭へ立寄、明日之支度令ニ相談ニ畢

④四日、刁刻ヨリ出立、尾州ニ下向、先冷泉亭へ向、山科内藏頭両三人令ニ同道、予何も乗物、僣儻四人・荷物四人・

鍵持一人・小者一人・青侍一人・以上十一人召具畢、已刻草津ニ令ニ休息、水口ニ一宿、及薄暮ニ雷雨甚、

⑤五日、早天雨晴日出之程、出水口、午前関地蔵ニ令ニ休息、至三石薬師ニ一宿

⑥六日、拂曉出三石薬師、至四日市場、桑名ニ行、路頭迄宣阿弥冷泉為レ迎出逢、桑名宣阿弥宿ニ令ニ休息、則乗船、

着ニ熱田、四条道場之末寺亀井之道場之内僧阿弥坊ニ一宿、亭坊事外丁寧之振舞共也、

⑦七日、早朝令ニ行水、熱田大明神令ニ社參、透廊之内入、悉令ニ見物、本社南面也、後ニ小社兩所アリ、此内東之

方寶藏ト云々、則草薙劔被藏所云々、此寶藏之下不ニ地震ニ云々、先年大地震之時處々傳説之間、試處、彼

寶藏下雨垂之内一切不レ震者也、雨垂外本社之下悉地震甚者也、奇妙々々、不レ及ニ言舌ニ云々

(空白)

⑧廿一日、雨降、勢多より令ニ帰宅、直ニ家君ニ參、路次中之様牀雜談申畢、家君へ伊勢みやけに魚箸・文函進レ之、

母堂へふのり・御萩等進レ之、次全斎へふのり・御萩・文匣等遣レ之、

⑨廿二日、(略) 今日当番之間已刻參番、勾当之御局へ伊勢御萩・のし一把進レ之、上様へ美濃柿百進ニ上之、

⑩二十六日 (略) 午刻山科内藏頭亭へ行、尾州国守野州へ先日罷下处、御懇之段禮使札可レ遣云々、予也書状共相

認ことつて遣畢

『言經卿記』¹² 慶長九年 (一六〇四) 二月・三月

⑪二十六日、(略) 倉口尾州来月下向ナリトテ、冷へ門出ニ罷向了

⑫二十八日、(略) 東寺宝輪院へ倉口ヨリ来月一日ヨリ聖天花水供一ヶ七日始行之事申遣了、尾州下向ニ付而、野

州御前仕合可^レ然様ニト祈念也

⑬四日（略）一、早晩倉口、冷泉、舟橋等同道、尾笏下向了、今日ハ水口ニ二宿也云々、路次ヨリ書状来了、

⑭十四日（略）一、尾笏ヨリ冷・倉口等書状到来了

⑮十八日（略）一、尾笏ヨリ、倉口ヒンキ有^レ之、野ヨリ馬給云々、則上了、去十六日ニ参 宮也云々、極薦同道也云々、馬ヲハ一乗寺へ遣了、傳介付而上之間、相添在所へ遣了

⑯十九日（略）真継美乃守ムスメニオツレテ来了、人参丁香散五服遣了

⑰廿一日（略）倉口上洛了、瀬田去夜宿云々、極薦同道了

『慶長日件録』は熱田社参詣の一人で和歌懷紙が伝存する舟橋秀賢本人の記録である。但し三月七日の熱田社参詣の記事を以て記録が中断され、再開は帰京・帰宅後の二十一日からとなり、尾張旅行時・伊勢参宮時の記録を欠く。また山科言緒の『言緒卿記』^⑬は、慶長九年（一六〇四）三月全日の記録を欠く。しかしながら、言緒の父山科言経の日記『言経卿記』には子息言緒からの音信記事があり、その断片的な記録と『慶長日件録』を併せて改めて見直すことで一行の旅程をより正確に把握したい。

旅程

では、史料①～⑰から一行の尾張旅行について概要を述べる。慶長九年（一六〇四）三月一日、舟橋秀賢は尾張出立の「門出」として、尾張に同行する冷泉為満邸を訪問。門出の宴が開かれた①。翌日、秀賢は使者を以て母に尾張出立を告げ②、三日、秀賢は禁裏長橋局に暇乞に伺い了承を得、父枝賢・大聖寺恵仙・近衛前子・信尹に節句の挨拶を行った。これは暇乞の挨拶も兼ねたものと推測される。その後、為満・言緒を訪ねて旅支度の相談を

冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・真継康総の尾張旅行（伊藤）

行つた(③)。四日、秀賢は先ず冷泉家に向かい、為満・言緒達と合流。「予何も乗物」とあるから輿に乗つての旅路である。輿丁と荷物持が各四人・鎧持一人、小者一人、青侍一人の計十一人を引連れたが、人員構成から彼等は秀賢の従者と察せられ、為満・言緒の従者も含めれば、大凡二・三十人程の行列であつたと思われる。巳刻(午前十時頃)には近江国草津にて休憩、水口で一泊となつたが、夕方より雷雨となつた。(④)、翌早朝には晴天となり、水口を出発。昼前には伊勢国関で休憩、同国石薬師に一泊する(⑤)。翌早朝出発、四日市場(四日市)に至り陸路を桑名に進むと、宣阿の出迎があり、一行は桑名の宣阿弥宿で休息、その後桑名から海路を経て熱田に着岸、熱田亀井道場の僧阿弥坊に一宿した(⑥)。桑名・熱田では亀井道場時宗僧が一行を歓待している。

七日、秀賢は早朝行水して身を清め、熱田社に参拝した。特に「透廊」の内側に参入し拝観を行つた。明記されないものの熱田社人による案内であらう。この後日記は空白となり、二十一日条より記録が再開される。秀賢は二十一日に帰宅、父母達に伊勢御祓やお土産を配り、翌日には内裏に参番し、伊勢土産を進上している(⑧⑨)。

この記録の空白を『言経卿記』で補いたい。三月十四日条に「尾苧ヨリ冷・倉口等書状到来了」とあり(⑭)、十四日に京着した為満(冷)と言緒(倉口)の書状は尾張から出されたことが判明する。尾張から出された書状が京着したのが十四日であるから、この書状は十四日以前、書状を届ける使者の移動日数を考えるとこの数日前に尾張国内で書かれたものであらう。すると熱田社参が七日であつたこと、三月十五日に熱田で和歌会を開催したという記事(前掲「張州雑誌」)を考慮すると、七日から十五日まで為満一行は尾張国内に滞在していた可能性が高い。詳細は後述するが、三月十六日に舟橋秀賢・山科言緒は尾張(熱田)から伊勢参宮に出発(⑮)、二十一日に帰京している(⑯)。真継康総は三月十九日には在京しており(⑰)、三月十五日の和歌会以降、恐らくは翌十六日に帰京の途についたものと思われる。

旅の目的

先行研究では熱田社参詣や熱田での和歌会参加のみが注目されていたが、史料を讀込むとこの旅には熱田社参詣以外の目的も窺知される。先ず旅の出立直前の史料に注目すると、①「来四日尾州へ可^レ令^三下向^二」、②「予尾州へ下向^レ」、③「次長橋局へ参、尾州へ罷下」とある様に、秀賢は行先を「熱田社」とせず「尾州」と記す。特に秀賢は長橋局に暇乞の理由を「尾州へ罷下」る為と説明している。山科言経も秀賢・言緒の伊勢参宮を「参 宮」(15)と記録しながら、「熱田社参」等とは書かず「尾州下向」(12)としている。これらの記述は旅の目的が熱田社参詣のみではなかったことを表しているのではなかろうか。

そこで史料12であるが「二十八日、(略)東寺宝輪院へ倉部より来月一日ヨリ聖天花水供一ヶ七日始行之事申遣了、尾州下向ニ付而、野州御前仕合可^レ然様ニト祈念也」として山科言緒(倉部)が出立前に東寺宝輪院へ尾張下向について「野州御前仕合」が然るべく成功するよう祈禱を依頼していることが判る。次に史料10を見ると「午刻山科内蔵頭亭へ行、尾州国守野州へ先日罷下處、御懇之段禮使札可^レ遣云々、予也書状共相認ことつて遣畢」とある。尾張から帰った秀賢が言緒邸を訪問の所、言緒が先日「尾州国守野州」の所へ下向した所、「御懇」の応接があった為、「尾州国守野州」に使者と礼状を送るべきだと言うので、秀賢(予)も礼状を認めて言緒に預けたという。

「尾州国守野州」とは誰か。尾張国守にして「野州」(下野守)と称される人物は、下野守・侍従・左近衛権中將・薩摩守を歴任し尾張清須城を居城として尾張国を支配した松平忠吉(徳川家康四男)であろう。(14) 忠吉は慶長五年(一六〇〇)に尾張国の領主に封じられ、慶長六年(一六〇一)三月には従四位下侍従に補任された。(15) よって言緒と秀賢が共に「先日」に「罷下」った際の礼状とは、先に見て来た慶長九年(一六〇四)三月の尾張旅行時の松平忠吉の接遇への礼状であろう。『言経卿記』の「野」(15)『慶長日件録』の「野州」(12)も下野守、即ち松平忠吉であり、

言経に馬を贈与する忠吉の厚遇ぶりが知られる(15)。

秀賢や言経が行先や目的を「熱田」や「熱田社参」に限定せず「尾州へ罷下」「尾州下向」と記したことは、この松平忠吉訪問もまた旅の主たる目的であつたからであろう。反面、行先や旅の目的を「尾張清須」「松平忠吉訪問」とも限定していないので、熱田社参詣もまた旅の主たる目的と考えられ、熱田社参詣・松平忠吉訪問も含め総合的に「尾張下向」(2)と表現されたものと考ええる。

伊勢参宮について

史料⑧⑨の伊勢土産の記述から、冷泉為満一行が熱田社参の後日、伊勢参宮を行ったことが指摘されており、筆者も一行の一部(言緒と秀賢)が伊勢参宮を行ったことには異論はない。しかし、三月十五日に両者が熱田に滞在し和歌会に参加しながら、十六日に伊勢国で神宮に参拝をしているのは日程的に不自然である。この点、先行研究も詳しく述べておらず「去十六日ニ参 宮也云々」の史料解釈は旅程全体を把握する為、また十五日の和歌会の開催記事の信憑性にも関わるので、考察の上、正確に論じる必要がある。史料⑮は「十八日(略)一、尾笏ヨリ、倉口ヒンキ有レ之、野ヨリ馬給云々、則上了、去十六日ニ参 宮也云々、極薦同道也云々、馬ヲハ一乗寺へ遣了、傳介付而上之間、相添在所へ遣了」とある。三月十八日、山科言緒が尾張から派遣した使者が馬(忠吉が言緒へ贈与した馬)を連れて言経邸に到着。「去十六日ニ参 宮」とある様に、言緒・秀賢(極薦)が伊勢参宮に向かったとの情報が言経に伝えられた。『慶長日件録』は三月十五・六日の記録を欠くが、熱田で十五日に和歌会が開催されたという「張州雜志」(17)の記録が正しい日程と考えた場合、「尾笏ヨリ」即ち尾張からの使者が十八日に京着し、その使者からの「去十六日ニ参 宮」という情報(記述)の「参 宮」が、伊勢国南部の宇治山田に到着し内宮・外宮で実際に参拝したことを意味すると

は考えにくい。使者は伊勢国ではなく尾張国より派遣されたからである。

すると十五日に熱田で和歌会があり十六日に尾張国（熱田と思われる）から山科言緒と舟橋秀賢が「伊勢参宮に出發した」と解釈してはどうだろうか。「去十六日二参宮也云々」とは、十六日に尾張から伊勢の神宮へ出發したと、伊勢参宮に出生したことを示していると考えれば、言緒は十六日に熱田から伊勢参宮に向かう旨を父言経に報告する為、松平忠吉より贈られた馬を連れた使者を京都へ派遣したものと理解できる。十八日に言経邸に使者と馬・書状（或いは口頭伝達）が届いた際に、十八日時点で情報を聞いた言経が十六日に伊勢参宮の旅に出生したという意味で「去」を付して「去十六日」と記録したものと考える。

こう考えると十五日の熱田での和歌会というのも道程から考えると合理的である。即ち往路は京都から東海道筋を進み桑名から熱田へ渡海し、復路もまた熱田から海路を経て伊勢国へ渡つたものと考えたと、和歌会が行われた港町熱田はその道中に当たり、和歌会は熱田社への奉納和歌の意味を込めた歌会でありながら、熱田の人々による公家衆への送別の意味を込めた歌会と見てもよからう。また熱田では船便に関して天候や風による逗留の可能性もある。

即ち言緒一行は尾張国到着後一泊、翌三月七日に熱田社を参拝、その後数日の間に松平忠吉と面会（面会場所は清須城か）、復路の途上、十五日に熱田で和歌会が催され、荷捌きや音信の準備を済ませた言緒・秀賢は、十六日に熱田から海路を経て伊勢参宮へ向かったものと推測される。

言緒・秀賢の両名は、熱田から伊勢国へ海路を進み、十六日、十七日、十八日、十九日、二十日で伊勢を往復して二十日の夜には近江国瀬田に投宿（⑧⑬）しており、実際に神宮を参拝できたのは十七・十八日頃ではなからうか。山田氏の指摘どおり「ふのり」・御祓は伊勢参宮の証であるが、もう一点「美濃柿百」（⑨）に注目すると、復路に伊勢国を縦断北上して美濃・関ヶ原辺りを経由して近江に入った可能性もあるだろう。尚、秀賢は長橋局への暇乞いで

も伊勢参宮について触れておらず(③)、『慶長日件録』『言経卿記』にも参宮に関する事前の記録が無いことから、二人の伊勢参宮は予定外の行動なのかも知れない。

さて、三月十五日に尾張熱田で和歌会に参加していた真継康総が十九日に京都の言経邸を訪ねている(⑩)。言経の使者の到着は十八日であるが、この使者は恐らく真継康総と十八日に帰洛して、使者は直ちに言経に面会し、康総は帰宅後の翌日に家族を連れて改めて言経を訪問し尾張滞在の様子を語ったものと推測される。史料⑮には「去十六日二参 宮也云々、極藤同道也云々」とある。言経は秀賢を同道して参宮に向かったと記録しているのだから、記述のない為満は参宮に向かっていないことを意味しよう。帰京或いは更なる尾張滞在といった和歌会以後の為満の行動については今後の課題としたい。

先行研究では和歌懷紙や熱田社参に関する研究視点から為満一行の尾張旅行が論じられた為に、熱田社参詣のみが注視され、旅程の全体像が把握されていなかった様に思われる。一行の尾張旅行は少なくとも熱田社参詣・松平忠吉訪問という目的があり、秀賢・言経は尾張旅行を好機とし更に予定外ながら伊勢参宮へと向かったものと指摘できる。

三、熱田社と地震に関する記録

『慶長日件録』には熱田社境内の記録があり(⑦)、慶長期における熱田社の祭祀・信仰や社頭景観を考える上で貴重な史料である。本稿では秀賢が記録した熱田社と地震に関する伝説・信仰に限りて述べておきたい。史料⑦には「熱田大明神社参、透廊之内入、悉令三見物、本社南面也、後二小社両所アリ、此内東之方寶藏ト云々、則草薙劔被レ藏所云々、此寶藏之下不レ地震云々、先年大地震之時處レ傳説之間、試處、彼寶藏下雨垂之内一切不レ震者也、

雨垂外本社之下悉地震甚者也、奇妙々々、不_レ及_二言舌_一云々」とあり、「小社両所」の内「草薙劔被_レ蔵所」の「東之方寶蔵」は「此寶蔵之下不_二地震_一云々」との伝説があつた。「先年大地震之時處々傳説之間、試處」とある様に、その伝説について試してみたところ、「彼寶蔵下雨垂之内一切不_レ震者也、雨垂外本社之下悉地震甚者也」と記される様に、周囲周辺の地震は甚だしいものであつたにも関わらず「寶蔵下雨垂之内」だけは一切揺れなかったという。秀賢は聞いた話と「奇妙々々、不_レ及_二言舌_一云々」との思いを日記に書き綴っている⁽¹⁹⁾。

この熱田社と地震に関する伝説は、山田蓉氏も「古来神劔を納めた宝蔵の下は、地震等でも動かないとの伝承があり、先年の地震（慶長八年十二月廿一日丑刻の地震のことか）に於ても同様であつたと記す」と注目していた⁽²⁰⁾。その後、鬼頭秀明氏により、熱田社の地震除御札に関する研究が進められた⁽²¹⁾。その成果によると、尾張国知多郡長尾村庄屋三井家には熱田神宮の「地震除災火防」の御札と御守が伝えられており、主に江戸時代中後期の諸史料から、地震に際して熱田宮中は揺れずに周辺の町々は揺れたと言われたことや、御託宣があつて熱田社へ群参があつたこと、尾張藩が地震・雷難等の災除の為に、熱田社家に御祈禱を命じたこと等、熱田社への地震に関する信仰が確認できるといふ。その後、太田正弘氏は「熱田雜集⁽²²⁾」において熱田社と地震に関する諸史料を追加・整理した上で、延宝六年（一六七八）年成立の『厚覧草』が熱田社と地震に関する伝説の文献上の初見とし、『厚覧草』の記述は「境内が揺れないと云ふのではなく、草薙劔を納める土用殿が揺れない、と云つてゐる」と注視する。

この様に江戸時代における熱田社の地震に関する信仰・伝説が明らかにされてきたが、地震時に熱田社の境内地の一部が揺れない（但し揺れなかったという場所・範囲は一樣ではない）という伝説の初見史料は早くに山田氏が注目していた史料⑦『慶長日件録』の慶長九年（一六〇四）三月七日条の史料となり、鬼頭・太田両氏の論考と関連付けて改めて見直す必要があると指摘できる。

四、注目すべき人物 — 松平忠吉と宣阿 —

次に、為満一行と交流のあった尾張国の人物として、先ず松平忠吉を、次に宣阿について見ておきたい。前述の様に言緒・秀賢は帰京後に忠吉へ尾張旅行時の礼状を認めている⁽¹⁰⁾。詳細は後述するが「野州御前仕合可然様ニト祈念」⁽¹²⁾が旅行の成立前に祈念されていることから、公家衆の忠吉（「野州」訪問は予定されたものであった。『慶長日件録』は三月七日以降の具体的な記事を欠くが⁽⁷⁾、十四日京着の書状が尾張から届けられていること、十五日に熱田で和歌会があったことから、七日から十五日の間も一行は尾張国辺りに滞在したことが窺われ、公家衆の忠吉訪問はこの間に限られよう。史料⁽¹²⁾には「二十八日、（略）東寺宝輪院へ倉部より来月一日ヨリ聖天花水供一ヶ七日始行之事申遣了、尾州下向ニ付而、野州御前仕合可然様ニト祈念也」とあり「野州御前仕合」が然るべきようにと、祈禱依頼がなされている。

『日葡辞書』⁽²³⁾には「シアイ（仕合）」の解説に「互いに剣術をすること」、「シアワセ（為合せ）」の項には「好機会、よい折、または、よい結果、あるいは、悪い結果」とある。また『日本国語大辞典』⁽²⁴⁾では「しーあわ・す・あはす【為合・仕合】」の意味は「①つじつまをあわせる。うまくやりおさせる。間に合わせる」と解説され、「しーあわせ・あはせ【仕合・幸】」の項目では「①めぐり合わせ。運命。機会。よい場合にも、悪い場合にも用いる。」「②幸運であること。また、そのさま」「③物事のやり方、または、いきさつ。事の次第。始末」と解説される。言経もまた、子息言緒と大大名である松平忠吉との対面が「仕合せ良く」いく様に、良い対面、良いめぐり合わせなる様に祈禱を依頼したものと考えられる⁽²⁵⁾。

では忠吉は公家衆との交流において何を期待したものであろうか。冷泉為満と松平忠吉との交流については、高木輝代氏による片桐氏所蔵『伊勢物語抄』の解説に興味深い指摘があるので次に引用しよう。⁽²⁶⁾

下巻の奥には、

御本云

右抄上下者依尾張侍従忠吉朝臣

御懇望家秘説之令進献

不可有他見者也

慶長第九天極月下三日

右近中将藤原為満

とある。「御本云」とあることから、為満自筆本からの直接の転写本であることが知られるが、書写年代も、その為満本に近い時期であろうと思われる。

「尾張侍従忠吉朝臣」は、尾張国清須城主、松平忠吉（一五八〇―一六〇七）のことであり、為満にこの書を「御懇望」した由が窺える。（略）史上、為満と忠吉の関係は確認し得ないものの、『大日本史料』の慶長九年（一六〇四）三月十五日条には為満が山科言緒らと尾張の熱田宮で法楽和歌を催していることが見え、同じ年のはじめに為満が尾張へ出向いていたことは興味深いものであるとともに、鎌倉時代から武家統領との交流を大事にしてきた冷泉家であって忠吉と家康との関係なども合わせ考えると、この奥書の言うところの信憑性は高いと思われる。

右の如く、高木氏は『伊勢物語抄』の原本は慶長九年（一六〇四）末に為満が尾張侍従松平忠吉の為に筆記したも

冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・真継康総の尾張旅行（伊藤）

のと推測し、その微証として同年三月に為満が山科言緒達と熱田社参詣の上、法楽和歌会を催したことを指摘している。しかし筆者が前述した様に『慶長日件録』『言経卿記』の「野」「野州」は忠吉であり、山科言緒・舟橋秀賢が松平忠吉の厚遇を得ていた史料は存在する。同じ様に尾張に滞在していた冷泉為満もまた忠吉と対面し、言緒達と同様の厚遇を得ていたと推定され、その結果が『伊勢物語』抄録の筆写・贈呈であると考ええる。また為満だけでなく、言緒・秀賢もまた忠吉と学問文芸分野について会話が合ったものと推察される。

『新修名古屋市史』⁽²⁷⁾によると、松平忠吉は「文・武両面に深い関心を持った」とされ、鉄砲は稲富一夢に師事して免許を得、弓術の名手・鉄砲弾薬の専門家や刀工藤原政常や武具職人等を招聘する等武備を行う一方で、「文学についても関心を有し、藤原定家自筆の『伊勢物語』を細川幽斎に所望して入手したことはよく知られている（『駿府政事記録』）。忠吉が『伊勢物語』を学んだことは、他に史料があり、文芸面での活動については今後明らかにすべき課題であろう」とされる。本稿で述べてきた公家衆の忠吉訪問や為満の『伊勢物語抄』のことも忠吉の文芸活動として再認識する必要がある。また「忠吉の人柄について伝える逸話は、温厚で思慮深さを物語るものが多い⁽²⁸⁾」というが、公家衆一行への忠吉の「御懇之段」⁽¹⁶⁾という厚遇ぶりにも、その人柄が窺われるのではなからうか。尚、慶長十一年（一六〇六）正月、江戸へ下向中の冷泉為満・山科言緒は尾張清須へ立ち寄っている⁽²⁹⁾。

次に宣阿について述べていく。『慶長日件録』慶長十年（一六〇五）六月十日条には「次尾州熱田四条道場宣阿弥許より書状到来、政常作小刀一進⁽³⁰⁾之」とあり、宣阿弥は「熱田四条道場」や「着熱田、四条道場之末寺亀井之道場之内僧阿弥坊」⁽⁶⁾とある様に宣阿は熱田の「亀井道場」（時宗寺院亀井山円福寺⁽³¹⁾）の時宗僧である。「桑名宣阿弥宿」とあり、宣阿弥は熱田の対岸桑名にも旅宿を有したらしい。宣阿は四日市桑名間の路頭に出迎えていることから、公家衆一行の中に事前に連絡を取り合う様な知遇の人物がいたと考えられる。

『言経卿記』慶長六年（一六〇二）九月七日条には「冷ニテ月次歌会有^レ之、トウ人千寿丸也、人数予・亭主・千寿丸・藤寿丸・四条・倉口・局臈・宣阿時衆等也」とあり、宣阿弥が冷泉邸月次和歌会に参加していることが判明する。参加者の中には「亭主」（冷泉為満）「予」（山科言経）「倉口」（山科言緒）「局臈」（清原秀賢）がおり、宣阿と一行は慶長六年（一六〇二）の段階で和歌会を通じて互いに面識があったのである。為満が桑名宣阿弥宿を経由して渡海、熱田亀井道場で一泊して社参するという旅程には当然宿所や乗船の手配が必要であり、ある程度計画が要る。冷泉為満一行と面識があった宣阿が公家衆の旅宿や乗船等の手配をしていた可能性が高いと考えられる。すると和歌をめぐる都と地方を繋ぐ為満の人脈が公家衆の旅を支えていたと言っても良いだろう。

おわりに

本稿では、慶長九年（一六〇四）三月の冷泉為満・山科言緒・舟橋秀賢・真継康総の尾張旅行を再検討した。熱田社参が行われた三月七日から、熱田で和歌会が開催された三月十五日の間に一行が松平忠吉を訪問し、忠吉の厚遇を得ていたことを明らかにした。これにより一行の尾張旅行の目的が、少なくとも熱田社参と松平忠吉訪問にあったことは明らかであろう。慶長九年（一六〇四）の歳末、冷泉為満は松平忠吉の懇望により『伊勢物語』の抄録を著すが、これも三月の訪問が影響していると想定される。この様に文芸に興味を寄せた忠吉であったから、三月の面会時にも忠吉と公家衆との間に文芸をめぐる交流があったと推測される。

また熱田亀井道場の僧宣阿もまた、冷泉一行を熱田の対岸である伊勢国桑名まで出迎え、熱田の宿坊（僧阿の宿坊）でも日記に特筆されるような丁寧な応接ぶりであったというが、この宣阿は為満の月次和歌会に参加する程に和歌に

取り組んだ人物であり、同時に冷泉為満の和歌の人脈に連なることを指摘した。この和歌人脈が一行の尾張旅行の下支えとなっていたと理解できる。

公家衆にとって、徳川一門の大名松平忠吉との人的交流の構築⁽³³⁾という目的も察せられるが、熱田社参・伊勢参宮・熱田での和歌会（奉納和歌）、そして文芸に関心ある松平忠吉への訪問・交流、また為満の和歌の人脈に連なる宣阿の協力といった視点から公家衆一行の尾張旅行を改めて見直すと、総じてこの旅は信心と文雅の旅であったとも言い得よう。

註

(1) この源康総が地下官人真継家の当主真継康総であることは拙稿「熱田社に奉納された源康総和歌懷紙について―源康総（真継康総）の人物像をめぐって―」（『皇學館論叢』五〇一六、平成二十九年）参照。

(2) 山田蓉「熱田社宝前の松を詠む」（『社報あつた』一四四号、昭和六十二年）

(3) 『新修名古屋市史』第三卷（平成十一年、名古屋市）

(4) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』（平成三年改訂新版、明治書院）「第七章 天正後期・文禄・慶長初期の歌壇」に「山科言緒はいうまでもなく言経男。母が冷泉家の出だから為満の甥に当る。（略）慶長九年三月には為満・秀賢と共に尾張に下り、熱田官法楽詩歌会に出席した（言経記・慶長日件録）」との指摘がある。但し同氏の為満の伝記的研究には熱田での和歌会に関する言及はない（井上宗雄氏「冷泉家の歴史（十三） 為満」（『しくれてい』六十三号、平成十年）。

(5) 神作研一『近世和歌史の研究』第四章 元禄―享保期の熱田歌壇」（平成二十五年、角川学芸出版、初出平成二十一年）に『慶長九年熱田社法楽和歌』として詠者の名と出典、和歌懷紙三点の現存といった基礎的情報を挙げ「コノ時ノ法楽ハ詩歌会

『言繼卿記』等」と記す。

- (6) 山本武夫校訂『慶長日件録』二(統群書類従完成会、平成八年)「彼自身の熱田参詣」との記述がある。

- (7) 熱田神宮文化課編・熱田神宮宮庁発行『熱田神宮名宝図録』(平成十二年、改訂再版)

- (8) 前掲註2山田氏論文

- (9) 『大日本史料』十二一二、所収「張州雜志抄」によると「慶長九年甲辰春、三月十五日、熱田社法樂和歌、春日陪熱田社寶前、同詠社頭松倭歌」とし、藤原為滿、藤原言緒、清原秀賢、源康綱の公家衆一行、尾張宿祢是仲、藤原直元、長岡真人守氏、栗田真人助典の社家衆(尾張・長岡・栗田は社家、藤原直元も記載場所から社家とも思われるが不詳)、法印玄方、權大僧都幸信・權大僧都以春・法師永信の社僧、其阿・僧阿・但阿・鎮阿・苾昌宣阿・阿弥三省の時衆僧或いは円福寺関連の僧侶、元隆(町衆加藤元隆)の名が見える。人物比定については前掲註3書籍を参考とした。

- (10) 前掲註2山田氏論文

- (11) 山本武夫校訂『慶長日件録』一(昭和五十六年、統群書類従完成会)

- (12) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 言經卿記』十二(平成四年、岩波書店)

- (13) 東京大学史料編纂所『大日本古記録 言緒卿記』上(平成七年、岩波書店)

- (14) 前掲註9『大日本史料』(十二一二)も「野州」を「清須城主松平忠吉」に比定し、前掲註12『言經卿記』の編者も史料⑮の「野ヨリ馬給」について「松平忠吉ヨリ馬ヲ贈」と註記する。

- (15) 『国史大辞典』(吉川弘文館 平成十二年)「松平忠吉」の項。

- (16) 前掲註2論文に「為滿一行は七日に熱田社参、十六日に伊勢参宮、二十一日に帰宅という行程であったと思われる。熱田社参後伊勢参宮まで詳細は不明であるが、その間は尾張に滞在したと考えることも可能であろう。」とある。

冷泉為滿・山科言緒・舟橋秀賢・真継康総の尾張旅行(伊藤)

(17) 前掲註9『大日本史料』所収「張州雜志抄」

(18) 「美濃柿百」が松平忠吉からの贈答品であったならば、その重量から馬と一緒に上京させたであろう。よって美濃柿は秀賢自身が参宮の帰路に献進の為に求めたものであろう。

(19) 史料⑦の熱田社の記録は秀賢の実際の見聞によるものだが、熱田社を案内されながら日記を書き綴ったものとは考えにくい。七日から二十一日までの記録を欠いているという点や、また旅行中という点、史料⑦の部分が何時書かれたものかが不明確な点から、記録する時点での秀賢の記憶が詳細な部分まで正確であったのかどうか、また「寶藏」等の言葉が案内人（社人と思われるが不明確）の実際の発言なのか、秀賢自身が選択した言葉（秀賢の表現）なのか等、史料⑦は旅行中期間の日記記録という性質に留意する必要があるだろう。

(20) 前掲註2山田氏論文。

(21) 鬼頭秀明「地震神になった熱田宮 武豊・三井傳左衛門家資料から」（社報『あつた』一七三号、平成八年）

(22) 太田正弘「熱田雜集一」（『社報あつた』二四五号、平成二十七年）

(23) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（昭和五十五年 岩波書店）

(24) 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』九（昭和四十九年、小学館）

(25) 対面・仕合せを考えるに当っては、豊臣秀吉の小田原征伐参陣に遅刻した伊達政宗と秀吉との対面が仕合せよく進んだことについて、江田郁夫「伊達政宗、二度目の遅参―政宗の宇都宮遅参をめぐって―」（『日本歴史』八三三号、平成二十九年）が参考となる。

(26) 高木輝代「冷泉為満の『伊勢物語抄』―その注釈方法と家意識」（『国文学』七八、平成十一年）

(27) 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』二卷（名古屋市 平成十年）第八章第四節「松平忠吉の入部」

(28) 前掲註27『新修名古屋市史』第八章第四節

(29) 『言経卿記』慶長十一年正月二十日条「内蔵頭ヨリ書状有之、去十六日尾張國清スヘ下着也云々、真継■美乃ヨリ便宜也云々」(東京大学史料編纂所編『言経卿記』十三、平成四年、岩波書店)

(30) 前掲註11『慶長日件録』

(31) 尚、熱田社と円福寺並びに両社寺と和歌に関する考察は前掲註2山田氏論文に指摘がある。

(32) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 言経卿記』十一(平成四年、岩波書店)

(33) 慶長十九年(一六一四)の冷泉為満から徳川家康への古今伝授については大谷俊太「付論―冷泉為満と徳川家康―古今伝授の意味」(『和歌史の「近世」道理と余情』平成十九年、ぺりかん社)に詳しい(加藤弓枝氏御教示)。また地下官人の真継康総と平田職清は徳川家康への取次を山科言経に度々願っている(『言経卿記』慶長六年八月十九日条、同年九月六日条、慶長八年二月七日条(『大日本古記録 言経卿記』十二及び十三、平成四年、岩波書店))

〔附記〕 本稿は平成二十九年八月二十八日に開催された神社史料研究会での口頭発表に基づくもので、席上貴重なご意見を賜りましたこと感謝申し上げます。

(いとう のぶよし)